法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

バタイユと「見出された幼年」 : インファンティア概念への一視角

SAKAI, Takeshi / 酒井, 健

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / 法政哲学
(巻 / Volume)
13
(開始ページ / Start Page)
13
(終了ページ / End Page)
24
(発行年 / Year)
2017-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00013946

バタイユと「見出された幼年」

――インファンティア概念への一視角

酒井　健

（一）　はじめに

一九世紀後半から西欧社会では、子供を対象にした考察や表現物が徐々に目立つようになる。二〇世紀に入ってもこの傾向は止まらず、むしろよりいっそうの広がりを見せ、そのまま二一世紀の今日に到っている。大人の合理的な考え方や生き方が近代社会の構築に貢献し、また重要視されていくにつれて、これに反比例するかのごとく、子供の世界への関心が高まった。

そこには、幼少期への素朴なノスタルジーに発する芸術表現もあるし、幼児期の体験に対する精神医学の探求のように深い観察もある。だがおしなべて見出せる傾向は、近代社会に齟齬を感じて、この食い違いを子供の世界に目を向けながら考え、何らかの形式でそうした思索や想念を表明する人々が増えてきたということだ。近代社会に生きながらもそこに根源的な疑問にかられる大人たちが、人間にとって大切な何か、近代社会の発展とともに忘れてしまった本質的な何かを、子供の不合理な発想や所作に見出して、近代メディアの舞台に浮上させていった。そしてその成果が、かなりの共鳴と反響を呼び起こして、今日に到っているのである。児童文学やアニメの隆盛は、単に子供たちだけが支えているのではない。「子供の領分」をもう一度捉えてみたい、できれば少しでも生きてみたいと欲する大人たちの願望が背後で影響を及ぼしている。

こうした「子供」をめぐる思索者、表現者の一人に、ジョ

ルジュ・バタイユ（一八九七―一九六二）がいる。一九二〇年代後半から一九六〇年代初めまで多岐の分野にわたって繰広げられた彼の文筆活動において、「子供」のテーマ系[1]は頻出し、重要な問いを読者に投げかけた。そこで一貫して問われているのは、子供が放つ否定と露呈の力である。大人の社会秩序やものの考え方、表現の仕方を根底から覆して、それまで隠されていたり抑圧されていた生の在りよう、人と人との関係、人と世界の交わりを露呈させるのである[2]。ただしこれを子供は気ままに行うのであって、気まぐれに何もしないという場合もあるのだ。

ともに、ここで補足しておかねばならないのは、この気まぐれな否定と露呈の力は、バタイユにおいて、「子供」のテーマ系に限った話ではないということだ。バタイユの他のテーマ系でも根幹を形成しているのである。バタイユの思想世界を横断している本質的な問題なのだ。確固と存在しているものが、それ自身の内側から沸き起こる力に否定され、解体され、消滅の危機にさらされる。そうして、もはや内側とも外側ともつかない不確かな生の事態、関係、交わりが出現するということ、これはバタイユの思想の全般に見られる主題である[3]。

拙稿では、このことを踏まえたうえで、バタイユの「子供」のテーマ系を検討していきたい。そのさいまず注目したいのが、文芸評論集『文学と悪』（一九五七）の「まえがき」にある「見出された幼年」（enfance retrouvée）という表現である。単純に理解すれば、この表現は大人が心のうちに甦らせる幼年を意味するが、バタイユにおいてはそれだけにとどまらない。大人と子供の関係の背後にさらなる問題が控えている。それを彼の重要な概念「存在するもの」（ce qui est）に触れながら検討していく。そして最後にはジャン＝フランソワ・リオタール（一九二四―一九九八）が提起したインファンティア（infantia）概念へ考察を繋げたい。バタイユにおける「子供」のテーマ系が、彼自身のなかで上記の気ままな否定と露呈の力に関わることを逐一意識しながら、バタイユ以後の現代思想とも響き合っていることを確認したいのである。

（二）ボードレールの「見出された幼年」（enfance retrouvée）

バタイユが『文学と悪』の「まえがき」で用いたこの言葉「見出された幼年」の出自はまずまちがいなくシャルル・ボードレール（一八二一―一八六七）の晩年の美術評論「現代生活の画家」（一八六三）[4]である。この美術評論は、画家で素描家のコンスタンタン・ギース（一八〇二―一八

九八）の人物と作風を、美術史や文化史、哲学思想史にまで視野を広げながら紹介し、[5]同時にボードレール自身の重要な諸テーマ、たとえば「現代性」（la modernité）を論じていて、たいへん読み応えがある。その第三章「世界人であり群衆の人であり子供である芸術家」に「見出された幼年」という言葉が強調を付して書き込まれている。

ボードレールの主張を端的に整理すれば、才能豊かな芸術家のその才能とは、自分が欲するだけ幼年を甦らせて、天真爛漫な子供の好奇心で世界を眺め、大人には陳腐に見える風景や現象にも新たなものを見出していく能力のことである。「天才とは好きなだけ**見出された幼年**（*l'enfance retrouvée à volonté*）のことにほかならない[6]」という後の時代に有名になったボードレールの文言の意味するところはおよそそういうことだ。もちろん幼年の好奇心と眼差しを甦らせるだけでは芸術作品は生まれない。作品を創造するためには、子供の感性で次々に摂取し心の内に無秩序に堆積した新鮮な世界のイメージを成人の理性で分析し、分類し、作品へ再構成していかねばならない。芸術家には、理性的な面もまた必要なのである。幼年の感性を基層としてその上に大人の理性を乗せるのが天才的な芸術家だとボードレールは見ている。

この二層性は、彼の「現代性」の概念にも言えることだ。永遠性と不易性を重視する古典主義美学の上に、時代ごとに現れては消える、束の間の美の表現を乗せて肯定するのがボードレールの「現代性」である。とはいえボードレールは両論併記の単純な相対主義者ではない。一八六〇年代半ばの印象派の到来を予告するかのごとく、「現代性」の概念は、上層の束の間の美の表現の方に重きが置かれている。同様に、天才芸術家においても、層は下になるが、幼年が重視されている。だからこそ、コンスタンタン・ギースの表現は、現実の対象に忠実な再現にはならず、不合理な「幻影」（la fantasmagorie）になり、魅力的だとボードレールは高く評価するのである。

そもそもこの「幻影（ファンタスマゴリー）」なる言葉は、一七八九年の大革命後のパリに登場し一八〇〇年代を通して西欧の大都会で人気を博していた見世物のことを指していた。あるいはそこで映しだされていた架空の恐ろしげな映像を指していた。暗い室内に半透明のスクリーンを張り、その後ろから幻灯機を使って幽霊や悪魔など非現実で不気味な映像を浮かび上がらせる興行が近代市民のあいだで流行し、そこから怪奇的な見世物および映像という意味でこの言葉は広まったのである。

だがギースは亡霊や骸骨を描いていたわけではない。同時代の光景、街路、人を描いていた。ボードレールによれ

ば彼は、関心領域を限定しない「世界人」として、日が沈みきるまで大都会の群衆にまぎれながら子供の目で情景や人物を眺め、夜になると暗い室内で昼間の映像を記憶の底から甦らせてはデッサン紙やキャンバスに描きだしていた。それは、「**子供じみた**知覚（une perception ***enfantine***）、つまりあまりの無邪気さゆえの鋭利で魔術的な知覚の成果[7]」だった。

（三） バタイユにとっての「幼年」

『文学と悪』の「まえがき」のバタイユは、こうしたボードレールの言葉をそのまま継承しているわけではない。一八六三年の詩人が眼前に見ていた近代と一九五七年の思想家が対応した近代とは違う。理性偏重の近代の病いはいっそう深まり、他方で子供の非理性への考察も深まっている。「見出された幼年」という表現にボードレールは「好きなだけ」「欲する分だけ」という意味の言葉（à volonté）を付加できていた。バタイユにはとうていできないことだ。この言葉を「やっとのことで」「ついに」という言葉（enfin）に取り替えている。他方で絵画の表現論のほうへ「幼年」問題を差し向けていたボードレールに対して、バタイユは、文学論の次元に立ちつつも、存在論、つまりどのように存在しているのかという実存の在りようへ「幼年」を差し向けて、よりいっそう根本的な次元で考察を展開させている。そして「大人」の理性との接続もボードレールほどスムーズに処理できなくなっている。「幼年」を再び生きることをもはや罪深いとみなさざるをえなくなっている。近代の壁はそれだけ厚くなってしまったのだ。該当箇所を引用しておこう。「文学は無垢ではない。有罪であり、最終的にそうした身であることを告白することになってしまった。行動だけが唯一、権利を持っている。私は本書でこのことをゆっくり語ろうと思うのだが、文学とは、やっとのことで見出された幼年のことなのだ。だが幼年がもしも統治するようになったのなら、はたして幼年の真実を持っていると言えようか。**行動**の必要性の前にカフカの誠実さが重く横たわる。カフカはいかなる権利も自分に認めなかったのだ[8]。」

バタイユの用語で「行動」（l'action）とは生産的な活動を指す。人間が自分あるいは自分が属する組織の存続のために有意義な目的を設定し、その目的の実現のために計画をたてて禁欲的に活動することがここでいう「行動」である。「労働」（le travail）とも言い換えられている。「行動」の骨子となる計画は「企て」（le projet）という用語で語られて、バタイユの重要概念になった。

近代の大人の社会は、この「行動」を重視してきたのであって、正しい事柄として公認して正当な権利を「行動」に付与している。「幼年」はこの「行動」とは反対に近代社会にとって直接に有意義な年代とはみなされていない。子供はそのままの野生状態では社会から肯定されない。社会に適合し貢献できる人材へ教育される必要がある。だがそういう人材になったときに子供の「幼年」は、内実、年齢ともに、終わっている。これは、自然界の物質にもあてはまる事態だろう。水、土、樹木、空気、陽光、何でもいい、自然界にある物質は、計量化から採取にいたるまで人為によって自然状態から切り離されて人間社会に役立つ存在へ変えられていく。そうして素材あるいは資材に変えられたときに物質は人間社会から肯定される。原生林や原野の光景を眺めて人はしばしばこれに感動し、その存在を称えるが、これは、そうした原初の自然がその人あるいはその人の所属する社会にとって無害であり、憩いや慰めなどとして間接的ながら近代生活に役立っている限りでのことにすぎない。環境保護や自然保護の必要性が叫ばれるが、そこに見え隠れしているのは人間の独善的な自然愛である。自然はこうあるべきだという人間からの介入である。牛や鶏、麦やトウモロコシを好きなだけ解体して食材にしておきながら、なぜイルカだけを愛するのか。

ボードレールが説くギースは、表現の次元で、子供の視像を大人の理性で作り直していた。しかしそれは、「幻影」であり、近代社会にそのまま適合し役立つ映像とは言いがたい。『文学と悪』「まえがき」のバタイユによれば、文学はもはや無垢ではなく有罪だとなる。つまり文学は、近代社会にうまく適合できないどころか、さらにその円滑な発展をも妨げる有害な表現だ言いたいのだ。文学者という存在も同様である。たとえ犯罪を犯していなくとも、「行動」重視の近代社会においては、道義的にいかがわしい存在であり、実生活の上でも規範を守りたがらず、どちらかといえば邪魔で、いないほうがいい存在なのである。カフカは小説のなかだけでなく、その生き方においても幼年を貫いて、社会的な権利を自分に与えようとしなかった。その事情をバタイユは『文学と悪』の「カフカ」の章で詳しく論じている。彼の父親が象徴する有用性重視の近代社会のなかでカフカは「排除された者として」[9]生きたというのだ。拙著『バタイユ入門』でもバタイユの論点を紹介しているので、[10]ここでは繰返さない。むしろより根本的な問いに取り組んでみたい。すなわち、なぜバタイユは「子供」のテーマ系にこだわるのか、その理由を考えていきたい。

この点で参考になるのが、一九四九年の論考「芸術、残虐の実践としての」の冒頭付近にある記述である。まずバ

タイユは、近代社会のなかで落ち着かず懐疑にかられている「子供」と近代社会のなかにすっきりおさまって何も疑わずに生活している「大人」を対比させている。子供についてはこうだ。「我々はみな、子供のときに、こんなふうに疑っていたのだ。自分がこの世で奇妙に落ち着かずいらいらしているのは、いずれその謎が解けるはずの罠あるいはいたずらの犠牲になっているからではないか、というふうに[11]」。対して大人の凡庸さが厳しく指摘される。「我々は今や、〈まったく自然なもの〉として我々に課せられている世界、かつて我々をいらだたせた世界とは全然異なる世界のなかで、このような子供じみた反応に背を向けて生きている。子供であったとき、我々は自分がこれから笑うことになるのか泣くことになるのかすらも分からなかった。しかし大人になった我々は、この世界を〈所有〉している。この世界を際限なく意のままにできる。この世界は、理解可能で自由に使用できる事物からできているのだ。この世界は、土、石、水、植物、動物でできている。我々は、大地を耕し、家を建て、パンや肉を食べる。我々は、ふだん、子供じみたいらだちを忘れてしまっている。我々は一言で言えば、疑ってみる、ということをやめてしまったのだ[12]」。

この懐疑が意味するところは何なのか。それは事物に囲まれながらも、事物を疑う子供と、事物を疑わずそのまま生活に活用している大人の違いである。子供は事物が事物ではない何かをはらんでいて、その何かに事物も自分も操られいるのではないかと疑っている。大人は自分が事物を自由に処理できると確信し、事物の主人になって安閑と暮らしている。カフカも含め、「我々のなかのごく少数の者だけが、この社会の巨大な機構のなかで、自分たちの本当に子供じみた反応にこだわっていて、この地球上で自分たちが何をしているのか、どのようないたずらが自分たちに仕掛けられているのかと依然素朴に自問している[13]」。この懐疑から、世界の奥を見たいという欲望が生じてくる。芸術の、とりわけ残虐な表現、そして宗教上の重要な儀式である供犠は、子供の欲望の延長線上にある行為なのだ。世界の事物とその奥という二重の世界観のもとで、事物を引き裂いて、その外観の内を見たいという欲望にかられた行為なのだ。「[この少数の者は]ちょうど板塀の隙間を見つけて中を覗き込もうとしている子供たちのように、この世界の裂け目からその中を覗いてみようとしている。そのような世界の裂け目の一つが供犠という残酷な習慣なのだ[14]」。

（四）「存在するもの」（ce qui est）

今しがたは私は「世界の事物とその奥という二重の世界

観」と記した。この言い方はあまり正確ではない。事物は同時にその奥をはらんでいて、両者はきっぱり分離して二重性を構成しているわけではない。近代の大人は事物をただ物体とだけ見て処理しているが、子供は事物が事物でないものを含んでいて、ときにそれが事物から発出し、自分をからかったり威嚇していると感じている。子供は事物が死んだ物体ではなく、何か生を持ち、それが何とも不可解な音信を放っていて、いらだちや不安を覚え、そして好奇心にかられてしまうのである。

ここにはバタイユの存在論が見てとれる。周知のごとくマルティン・ハイデガー（一八八九―一九七六）は「存在」を「存在者」から切り離して、「存在」の様態、つまりどのように存在しているのかという在りようを問う存在論を立ち上げ、終生の主題にしたが、そのさい「存在」と「存在者」を完全に分離させる二元論に立っていたわけではなく、むしろ両者を不即不離の関係に置いて捉えていた。しかしそこに「子供」という視点を導入していたわけではない。ハイデガーは「存在者」を「子供」に特化して語りはしなかったし、「子供」の感性が「存在論」を新たに開くとも力説しなかった。

バタイユは、「子供」の存在の仕方、そして「子供」の感性を重視しながら、二重かつ一重の世界観を語ろうする。この二重かつ一重の世界の内面の側、つまり事物に内在しながら事物に限定されず、人間の理性ではうまく捕捉できない面、バタイユは、この面を、とりわけその動きに注目して、「戯れ」（le jeu）、「気まぐれ」（le caprice）と形容した。近代の理性にまだ完全には支配されていない「子供」の内面もそのような非理性として自律した動きを呈している。それゆえ子供の感性、好奇心は、世界の内側に感応しやすいし、世界とともに戯れることができる。子供の遊びは世界の遊びに通じている。ヘラクレイトスは遊ぶ子供に生滅流転の世界の動きを見て文言「世界時間（アイオーン）は遊ぶ子供」（DK52）を記し、ニーチェは『ギリシア人の悲劇時代における哲学』（一八七四年頃の作品で遺稿）以来このヘラクレイトスの言葉を自身の世界観の根底的一要素に加えていく。他方でフロイトは、成人の内にも存続しながら成人の理性ではどうにも捕捉できない無意識的欲望を「小児的のもの」とみなし[15]、さらに晩年には個人の人格に収まらない不確定な広さを念頭においてこの無意識的欲望を非人称の「それ（エス、Es）」と呼んだ。バタイユは、ボードレールのほかに、彼らニーチェ、フロイトと、「子供」に根源的なものを見る見方を共有している。

二重にして一重の世界の内側をバタイユは、「内在性」（l'immanence）、「内奥性」（l'intimité）と呼んだが、さ

らにまた「存在するもの」（ce qui est）と名指しもした。一九四四年刊行の断章形式の思索書『有罪者』の最初の章「友愛」にこの「存在するもの」という概念は何度か登場する。或る断章では「それ」（cela）とも言い換えられていて、「自我とエス」（一九二三）のフロイト、これに先んじて『善悪の彼岸』（一八八六）第一章の断章一七番で「われ」ではなく「それ」を思考の本源としたニーチェとの近さを連想させる。だがこの「友愛」の諸断章において、「存在するもの」は事物との差異に力点が置かれて説かれている。例えば「《存在するもの》――お望みならば、宇宙と言ってもいい――を有用な事物の類似物に還元することほど笑止千万なことはない！」[16]というふうに。

対して一九四六年発表の論考「アンドレ・マッソン」の次の文言は二重にして一重という曖昧さを端的にこう説明している。「いかなる事物でも、ある一点で、《存在するもの》の一面に触れているのであって、そのことを見てとらない限りは、人はその事物の取るにたらない外観しか認識できない。ところでこの《存在するもの》とは我々が掴むことができない、さりとて掴まずにいられない何ものか、我々が知ることも無視することもできない何ものかなのだ、**そして我々を取り囲んでいる**何ものかなのだ…」[17]。

事物と《存在するもの》との関係は融合でもなければ分離でもない。バタイユは「内的体験」と称する脱自体験の極みにおいてこの曖昧な関係を生きる。彼の「非-知の夜」とはまさに自我とその外部、知と非-知、既知なるものと未知なるものの交錯、混淆、相克である。

（五）インファンティア概念

リオタールは『ポストモダンの条件』（一九七九）の「序文」で近代（モダン）を「大きな物語」の時代と規定し、その終焉を予告した。大きな目的を設定しその実現にむけての前進、進歩、刷新を称える時代が政治から科学まで終わろうとしているというのだ。一九八九年一一月の「ベルリンの壁崩壊」をもって近代は終焉したなどと単純に歴史を見ることはできないが、それ以降「大きな物語」だけでは理解できない時代へよりいっそう複雑に西欧社会が入っていったのは事実だろう。一九九一年刊行の『幼年読解』でリオタールは、そのような新たな時代を理解する一つの角度を呈示するがごとく、インファンティア概念を繰り出した。基本となるのは二重にして一重の世界観である。扱われいる六人の書き手（ジョイス、カフカ、アーレント、サルトル、ヴァレリー、フロイト）の内でフロイトが最も重要な存在であるが、《存在するもの》をめぐるバ

タイユの世界観のエコーを聞き取ることができる。序文にあたる「インファンス」(infans)[18]では、インファンティアを「自らを語らぬもの」「人生の一時代ではない幼年、過ぎ去ることのない幼年」と定義したあと、さらにこう説明を続けている。「インファンティアは言説(le discours)に取り憑いている。言説の方は絶えずインファンティアを遠ざけておこうとする。言説はインファンティアからの離別なのだ。だがそうすることによって言説は、インファンティアを失われたものとして執拗に構成し続けている。言説は、そうと知らぬ間に、インファンティアを庇護しているのである。インファンティアは言説の残余なのだ。幼年は幼年の家の中に在り続けるのだが、それは幼年が大人の家の中に住んでいるのにもかかわらず、ということではなく、幼年が大人の家の中に住んでいるからこそなのである」[19]。

リオタールが典拠しているのはフロイトの「鼠男の症例」と呼ばれる一九〇九年の研究論文の一節[20]であるが、無意識的な「小児的なもの」が大人の意識の残余として存在し続けること、つまり大人が幼年を排除して大人であろうとすればするほど、そのせいで幼年がそのままに存在を確保し、大人の意識のうちに棲みつくという逆説を強調している。そして本文の「声―フロイト」の章ではさらに考察が深められている。インファンティアと言説の関係は、「音色(あるいは響き)としての声」(フォネー、phônê)と、語句に分節化された「発話行為」(レクシス、lexis)との関係に置き換えられる。「発話行為」は、発話者とその聞き手を設定していて、前者から後者へ意味伝達が行われる。「物語」はこの「発話行為」を基本とするのだが、しかし「発話行為」は「声」によって成されてもいる。そしてその「声」には何かしら情動(l'affect)による音色、響きが付着している。「音色(あるいは響き)としての声」が帯びるその情動は、例えば快と苦、あるいはそのどちらかを、表明しているが、フロイトの無意識的欲望つまりエスと同様に、人称性を持たない。誰が発するのか、その根底的な帰属が不明なのだ。また誰に送られているのか、その声の行き先も不明であり、伝達の意味内容も定かでない。熱い風、冷たい突風のように吹き抜けていくのだ。この不確定で無限定のフォネーをレクシスは分節言語へ屈折させ、抑圧し、隠蔽しようとするが、フォネーの情動はこれに気ままに従ったり抵抗したりしながら、レクシスの残余として存続し続ける。バタイユが説くカフカのように「排除された者として」大人の社会に居続ける。

大人はこうしたレクシスを耳にしても意味を受け取って満足し、自分の合理的で有益な生活を続行する。しかし子供はどうだろうか。リオタールからバタイユへ戻って、子

供の懐疑を想起しよう。大人の会話を聞きながら、だまされているのではないかといらいらして、レクシスに密着したフォネーの正体を知りたいと好奇心を燃やすのではなかろうか。

リオタールだけでなく、フーコー、ブランショ、デリダ、ナンシーと続くフランス現代思想は、話し言葉だけでなく、書き言葉にも、そして図像にも、二重にして一重の存在を見ていく。そして残余として存続する力の遊戯的効果を推し測っていく。もちろん、そこには安直な大人の相対主義は介入していないはずだが、バタイユが「内的体験」の時空にこだわった理由を忘れてはならないのだろう。すなわち小児的な拒否の現在にこそ、「何らかの確定された状態ではなく、与えられたもの――それが何であれ――を拒む人の必然的に不確定の闘争のなかにこそ、**人間の特質**を見出す」[21]姿勢を忘れてはならないのだろう。

（了）

《註》

（1）バタイユの用語で言えば、「子供」（enfant）、「幼年」（enfance）、「子供っぽさ」（enfantillage）、「未成年」（mineur）、「小児の」（infantile）、「子供らしい」（enfantin）、「子供っぽい」（puéril）などがこのテーマ系を形成している。このテーマ系を扱った先行論文として次の好論をあげておく。井岡詩子著「文学における《子供らしさ》と至高性――バタイユのニーチェ論とカフカ論の比較を通して」、『表象』第9号、一九七―二一二頁、二〇一五年四月。

（2）「子供」のテーマ系に関わるバタイユのテクストや関心を年代順に大雑把にあげると次のごとくになる。まず一九二八年出版の『眼球譚』である。主人公の少年と少女は、奔放な性生活をエスカレートさせていき、ついには教会堂内での神父の陵辱、殺害に及ぶ小説である。続く『ドキュマン』の時代（一九二九―三一）には論考「プリミティフ・アート」（一九三〇）においてエティオピアの教会の壁や扉に描かれた子供たちの落書きが新たな美学概念「アルテラシオン」（根源的な変質を表現媒体や表現者にもたらす動き）の例としてあげられている。教会の壁や扉はもはやそれら本来の機能を否定され、キャンバスのごとくに変質している。『社会批評』の時代（一九三二―三五）の時代ではレイモン・クノーとの共著論文「ヘーゲル弁証法の基底への批判」（一九三二）の末尾に問題提起として「父親と息子」の関係が書き込まれている。つまり近代社会を生きる大人の構築的理性と子供の衝動の対比関係、つまり自然界の不分明な否定の力に立ち返ってヘーゲル弁証法の基底を捉え直す本論考の主題に沿ってこの対比関係を再考察する要請が示されている。一九三〇年年代後半の秘密結社〈アセファル〉、雑誌『アセファル』の時代（一九三六―三九）になると、新たな共同体の原理としてニーチェを援用しながら子供のテーマが浮上する。すなわち雑誌『アセファル』掲載の「ニーチェとファシスト」（一九三七）では、

国家主義型の共同体からの離脱を可能にする力として「未来の子供」(『悦ばしき知』断章三七七番「我ら祖国なき者たち」)、さらに「子供たちの国」(『ツァラトゥストラ』第二部「文明の国」)が典拠されている。と同時に同じく『アセファル』掲載の短い論考「ヘラクレイトス」(一九三七)では、初期ニーチェの遺稿『ギリシア人の悲劇時代の哲学』に収められたヘラクレイトスへの言及、とくに「遊ぶ子供」(ヘラクレイトスの断章52(DK)が取り上げられ、ものみな解体する生滅流転の世界時間の原理として紹介されている。第二次世界大戦中に執筆され刊行された『内的体験』(一九四三)では「子供っぽさ」として子供の行為を批判する大人の自己本位の姿勢が指弾されている。意味するところは、バタイユの脱自体験(extase)を導く情念の遊び、跳躍を「子供っぽさ」の力に求めているということである(『内的体験』第二部「刑苦」)。戦後のバタイユは自ら創刊した『クリティック』をはじめ様々な雑誌に論考を発表し、書物も次々に上梓したが、そこでも「子供」のテーマ系は頻出する。この拙稿で取りあげる『文学と悪』(一九五七)の「まえがき」及び本論のなかの「エミリー・ブロンテ」、「ボードレール」、「カフカ」の章がとくに注目に値する。そして最晩年の『ジル・ド・レ訴訟録』(一九五九)の長文「序文」でバタイユはこの荒ぶる中世末期の戦士貴族を「化け物じみた子供」とみなして考察を進めている。

(3) 以下思いつくままに、この自己否定の重要な例をあげておく。まず神(キリスト教神の Dieu)である。バタイユにおいて神自身の本質は神の自己不満であり、神自身への否定を、つまりは神の不在を招来させる。神は「無神論者」だということになる(『内的体験』第四部「刑苦追記」第一章「神」)。バタイユが問題にする思考(la pensée)も同様の内部からの自己否定を抱えて、それが思考にそれ自体の解体をもたらす。バタイユにおいて「考えること」の本質は懐疑であり、この懐疑は思考自身を内側から稼働させついには「大破局」(catastrophe)へ到らせる。そうして思考しえないものを出現させる(『内的体験』第三部「刑苦への前歴」所収の「死はある意味で欺瞞である」)。知(savoir)も同様である。知る行為の内実も知る行為自身を内奥から駆り立て、ついには「非-知」の力となって知の成果を破壊する(『内的体験』第二部「刑苦」)。生きるという事態もそうだ。生の内実の力が十全に称えられると、死を招来する(『エロティシズム』「序文」)。

(4) 「現代生活の画家」(« Le peintre de la vie moderne »)は『フィガロ』紙に一八六三年一一月二六日、一一月二九日、一二月三日の三度にわけて掲載された。

(5) ただしボードレールはギースをただ「G氏」とのみ表記している。

(6) Charles Baudelaire, « Le peintre de la vie moderne », in ***L'Art romantique***, Charles Baudelaire, Calmann Lévy, Paris, 1885, p.63.

(7) ***Ibid.***, p. 68.

(8) Georges Bataille, ***La Littérature et le mal***, Gallimard, Paris, 1957, in ***Œuvres complètes de Georges Bataille***, tome X, Gallimard, 1979, p. 172.

(9) ***Ibid.***, p. 276.

（10） 酒井健『バタイユ入門』、筑摩書房、一九九六年、二二六―二二一〇頁。

（11） Georges Bataille, « L'art, exercice de la cruauté », ***Médecine de France***, no. 4, Paris, juin 1949, in ***Œuvres complètes de Georges Bataille***, tome XI, Gallimard, 1988, p. 481.

（12） ***Ibid.***

（13） ***Ibid.***

（14） ***Ibid.***

（15） Cf. Sigmund Freud, ***Bemerkungen über einen Fall von Zwangsneurose*** (1909), in ***Gesammelte Werke VII, Werke aus den Jahren 1906–1909*** (1941), S. Fischer, 1993, p. 401。以下、該当箇所の邦訳である。「あなたはそのようにして、ついでながらに、無意識の主要な性質を発見したのです。つまり、**小児的なもの**との関連（die Beziehung zum *Infantilen*）です。無意識は小児的なもの（das Infantile）で、しかも小児の当時にその人から切り離されたその人の一部分で、さらなる発達には加わらず、それゆえ**抑圧**されたものなのです。こうした抑圧された無意識の派生物（蘖（ひこばえ））が、不随意的な思考を養っている諸要素であり、その不随意的な思考の中に病気が存在しているのです」（「強迫神経症の一例に関する見解「鼠男」」福田覚訳、『フロイト全集』第一〇巻、岩波書店、二〇〇八年、二〇一頁）。

（16） Georges Bataille, ***Le Coupable***, Gallimard, 1944, in ***Œuvres complètes de Georges Bataille***, tome V, Gallimard, 1973, p. 250.

（17） Georges Bataille, « André Masson », ***Labyrinthe***, no. 19, Genève, le 1er mai 1946, in ***Œuvres complètes de Georges Bataille***, tome XI, Gallimard, 1988, p. 35.

（18） インファンス（infans）はラテン語であり、『羅仏辞典』（ラルース社）によれば「①語らない人、②幼児」を意味し、インファンティア（infantia）もラテン語であり、意味するところは「①言葉をもてない状態、語る能力の欠如、②幼年（期）」である。

（19） Jean-François Lyotard, ***Lectures d'enfance***, Galilée, Paris, 1991, p. 9.

（20） 注の（15）に引用されている一節。

（21） Georges Bataille, ***La Souveraineté*** (écrit posthume dans les années 1950), in ***Œuvres complètes de Georges Bataille***, tome VIII, Gallimard, 1976, p. 379.